小島烏水全集

第七卷

小島烏水全集

第七卷

大修館書店

小島烏水全集　第七卷　（第二回配本）

定價七二〇〇圓

昭和五十四年十一月二十日印刷
昭和五十四年十一月三十日發行

著者　小島烏水

發行者　鈴木敏夫

印刷者　青木勇

發行所　株式會社　大修館書店
東京都千代田區神田錦町三―二四
電話〇三（二九四）二三二一（代表）
〒一〇一振替（東京）九―四〇五〇四

第七巻　目次

日本アルプス　第二巻

箱根山中より（序に代ふ）　三

《富士及裾野》

鴉の群　二

高原の冬の驛路　二七

富士の五月雨雲　三五

三味線林　三七

追羽子　四〇

雪中富士登山記　四九

笠雲の富士（須山口登山案内）　五八

東海道名所記　六七

*

日本北アルプス縱斷記　八九
一　槍ケ岳第三回登山　八九
二　鎌尾根縱走　九六
三　雙六池　一〇〇
四　雙六岳及び蓮華岳　一〇八
附　蓮華岳採集の蝶に就いて　山名に就いて　一一五
五　鷲羽岳赤岳及び黑岳縱走　一一六
六　「雲の平」高原より黑部川に下る　一一三
七　藥師澤の右俣谷を溯る　一一九
八　藥師岳及び藥師峠　一二五
日本北アルプス風景論　一四〇
一　日本北アルプスの遠望及び其成生　一四〇
二　日本北アルプスの境域及び飛騨山脈なる名稱　一四四
三　岩石及び山形　一五一
四　日本北アルプスの火山　一五九
五　剩筆　一六四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山岳紀行文の趣味　一六六
信州と風景畫　一七〇
トルストイの死　一八一
トルストイと冬の自然　一八六
簡易生活と單純藝術　一八九
郷土詩人としての鏡花　孤雁　通治　未明　一九四
女性と自然の觀かた　二〇三
新緑の富士の裾野　二〇七
裾野なる名稱　二二五
舌とペンと　二三六
圖版解説　二六一

凡　例　二七四
日本アルプス探檢地理　二七七
一　日本アルプスとは何處なりや　二七七
二　日本南アルプス　二八一
三　日本中央アルプス　二八七
四　日本北アルプス　二九一
高山の雪　二九九
日本アルプスと萬年雪　附　穗高山論　三一八
第一章　穗高山と神河内　三一八
第二章　氷河の遺跡　三二七
第三章　萬年雪の準氷河作用　三三三
第四章　萬年雪の諸現象　三四一
第五章　萬年雪とサアカス　三四六
第六章　萬年雪と氷河　三六一
日本アルプスと氷河問題　三六八
一　氷河小史　三六八

二　日本の山岳と氷河　三七二
三　歐洲の氷期と日本の珊瑚期　三八〇
四　日本に於ける寒帶的氣候の假設　三九六
冬季日本アルプス觀望汽車旅行　三九八
一　冬季山岳觀望の好季節　三九八
二　本邦中央高原地の日本アルプス觀望　四〇二
三　東海道の富士火山帶觀望　四〇六
冬の旅行と峠　四一〇
高原の色と光　四一四
木曾山脈を汽車の窓より　四二一
冬の木曾路　四二五
自然の描寫　四二九
山岳地理研究　四三三
菜の花　四三九
山岳の水彩畫家　四四一
日本アルプス探檢用の地圖に就きて　四五一

谷より峰へ峰より谷へ　四五三
穂高岳より槍ケ岳まで岩壁傳ひの日誌　四五三
灰　四五四
神河内　四六五
森林より穂高岳へ　四七〇
穂高岳より槍ケ岳へ　四八〇
谷　四九〇
穂高の御幣岳（新登路より初登山の記）　四九六
圖版解説　五〇六
解題・解説　近藤信行　五一五

小島烏水全集　第七巻

日本アルプス

第二卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

箱根山中より（序に代ふ）

一

半月ほどの休暇をもらつたので、箱根の底倉まで來た、溫泉宿に居ても、所謂湯治客となるほどの心の餘裕は、私には無くて、手は殆んど新聞紙にも觸れずに兩三年來の旅日記を、飜展、檢閲するのに忙しい。

旅日記といふのは、富士山のが六册、日本北アルプスのが一册である、大概は鉛筆の痕が、模糊として、あやしい文字が斷續してゐるに過ぎないが、併し拾ひ讀みして行くうちに、幻を追ふやうに、刹那々々の印象が、浮いて來て、記憶は藪蔭の白い花のやうに、次第にハツキリと、腦髓の中に喚び起される。

私は凡べての藝術は、抑へ難き內心の衝動から、發生する性質のものであり、又あらねばならぬと信じて居るが、私の境遇は、その衝動の放散する出口に、固く戸を鎖すだけの、耐忍力を平常から養つてゐる、恰度春の末、藁屋根の東面も、南面も、皆雪が解けても、西の一角だけは、そつくり氷つて、結ぼれてゐるやうに、私の心の內部の導管は、冷たい氷柱になつて保護せられてゐる。

それが、この溫泉宿に來て、自分の身體になると、俄かに、創作的本能とでもいふやうなものが忍び足に拔け出して、心の窩を覗つては閉鎖の戸を敲くのである、未だ私の眼の底には、去年の日本アルプスの白雪の輝きが、潛んでゐる、未だ私の髮の毛には、偃松の脂の匂ひが、消えずにゐるのではあるまいか。

そこで筆を執つて、少し許り舊稿を添削して見た、大部分は新に起稿するとして、「富士及び裾野」と「日本北アルプス」と雜論文の三篇とを獲る見込が出來た、之を合册して、本年の初夏『日本アルプス』第二卷として出版することに決めた、かう決めると妙なもので、是が非でも纏めるといふ方へ氣が入つて、半分は所謂工人的努力で、ひたすら進行を貪つて、日課として書き上げた、さうでもしなければ、多忙なる私は、永久整理の途が無いからである。

又しても山の紀行文かと冷笑されるのも承知である、このやうな努力も、何の同感も呼び起さずに、自滅してしまうのも、それが運命とあらば、何とも致し方が無い。

私の微力なる文學的事業（と言ひ得べくば）は、文藝の曠野に、アルパインの山岳から採集した異色の花を植ゑつけやうとするところにある、元來が下界に育ち惡い性情を有してゐるためか、又人間に無交渉な爲か、それとも手際が拙い故か、兎角に根を張りさうにもない、併し私はそれに怯まず、自ら此花の性情に適したと信ずる土を搬び、岩石を据ゑ、水を灌ぐだけの苦心を以て、述作に從つてゐる。

親切なる傍觀者は私の無益なる勞力を憫れんで、今日の立派なる文藝を有する傍らに、この貧弱なる創作を提供するのは、梅櫻桃李あり、牡丹芍藥ある傍に、徒らに珍奇なる、名も知れぬ、小さな草花を埋めて行

くやうなものであると、反省を促してくれる、併し私はかういふ異色の花も、あつていゝと信ずる、又存在の驕奢を許され得るものであると信ずる、その忠言に服從するよりも、先づ自分のやりかけた事業の荒廢するのを惜しむのは、あながち私情のためばかりでは無い。

たとひ私の立脚地が文藝の大道と辛うじて并行する、小さな傍道であるとしても、私は人の拓いた坦々たる街道に、輕車を驅るの易きに就くよりも、自分の金剛杖を押し立てた地點を、獨守してゐたいのである。

二

旅行といふことに就いて思ひ出す、エリザベス朝の戯曲家は「人間の一番幸福であるのは、自分を忘れるときに在る」と言つた、又「自分の鄕里と、自分自身から、自分は出て行く」と言つた詩人もあつた、東洋にも古くから、忘我といふ語がある、併しもし忘我といふことが自分を全然沒却して、材木のやうに無神經無感覺になると言ふならば、それは到底出來ない藝である。

假に此語を、私自身の地平線に立つて解釋するとすれば、それは凡べての愛に於て然るが如く、その對象の人間なると自然なるとを問はず、個性の單調、無味、寂寞に堪へなくて、自己ならぬ或物と、自己とを一體融合するために、自己を或物に與へ、又或物を自己に受けることがそれではあるまいか、畢竟人間は獨住孤座に堪へないで、何物をか、無限の肉食とするか、又させられねばならぬ約束があるのではあるまいか。

つまり忘れると言ふのは、世間の羈絆や、制約や、理義やから超絶して、そこに一切の雜念を交へず、純

粹なる內的生命が、對象の或物に合體するために宛らに八萬四千の毛孔から、發散して行く際に生ずる、冷たい恍惚の謂ひであらう。

斯くして私は山に入つた、獨住孤座に堪へぬものが山に入るのは、矛盾のやうに思はれるかも知れぬが、千萬人の個々特立した心がある、殷賑な巷にゐて、顏と顏と向き合ひ、肩衣と肩衣と相觸れても、そこに何の密接な抱合もない、徒らに絕壁の如く嶮なる顏面の出沒するを覺えるに於て、驚嘆と、愛慕と、渴仰とを、天外の自然に求めて山岳を獲たのは、私自身には、相應した傾向であると思つてゐる。

私は人間の中に混じては、時に獸類の如く耻なくして、爭ひ多き身を哭きたくなる、併しそれは高山大岳に登つたとき、糜爛した神經より脫却して、官能が幾分か新たになることに依つて、僅に回復されるのである。

私は初め山岳に對して、雪の外に何物をも戴かない老衰無言の、白頭翁と思つてゐたのが、登つて見れば、包まれた女の肌のやうに輝ける石を挿み、パステル畫のやうに美しい空氣を貫いて立つてゐるではないか、私は山といふ石の頁を開いて、大なる存在の喜悅に接したのである。

「壯大、そは羅馬なりき」と叫ばれた驚嘆は、我が富士山にも、日本アルプスにも移されるのであつた。

この壯大なる、しかして永久なる海拔一萬尺以上の「冬の都府」は、私の眼には殆ど有らゆる自然を綜合したミューゼアムと、劇場と、サロンとを兼ねて映つたものである。私は經典を求めて、天竺に入る僧侶の敬虔と、繪畫彫刻の修業のために佛蘭西や伊太利に渡航する藝術家の熱望と同じ程度のそれを荷つて、殆ど

毎年缺かさずに富士に遊び、日本アルプスに分け入つては、日記の反古を製造して、悔いずに戻つて來るのである。

三

富士山に就いては、私は今更多く言ふ必要は無い、アーサア・シモンズの『都會論』に水の都ヴェニスを論じて

私は何故誰でもヴェニスを描くのか解らない、けれども繪を描く人は誰でもヴェニスを描く、併しヴェニスを描くことは、それ自身が繪畫であり、仕揚られ、知覺された藝術上の作品であることを忘れてゐるのだ。君は在るが儘に、繪を改良することは出來ない、ヴェニスでは一物も加へられず、何物も整へるものとては無い、出來上つた萬物は、君を俟ち、君を恍惚とさせ、君を痲痺させる、凡べての物の技術上の效果は、今のまゝで既に完全である、もし君がそれに對して、技術上の計畫を有するなら、それは君を如何ともせざらしむるものである。

と言つたが、我が容儀端正なるクラシカルの名山富士も、亦既に渾成せられた美術品で、古來富士山の繪畫や文學に、是といふものが無いのは、最早人類に對して、この山を對象とした技術上の設計の、無用なことを宣言せられたものと、見做していゝのかも知れない。

併し私は、太陽と影との技術師が、富士山をどう自由に染めたかを觀た、その寶永の噴火口に、朝日の金

光が、玻璃の切り口に沁みわたるやうにキラ〳〵輝くのを觀た、はた雲や霧が、富士といふ白壁や、裾野といふ綠の敷石に、痣のやうな影を落しては、傍から踏み消して行く、はかないたはむれをも觀た、その又晴と陰との入れ代る間から、日本國に比類の無い、悠つたりと大なる、緩やかな傾斜から、諧調の線が引き落されてゐるのを觀た、さうしてあのパセチツクな慈悲のあるやうな、冷たく突き放すやうな、美しい蠟石の顏を仰いでゐると、律呂の整調した音樂を聽くやうな感じがされる。

私は觀た通りを描いた、私の手は、眼の命令に從ふには、あまりに不自由ではあるが、併し大技術師の自然に引つ張られて行く間は、私はさまで多くの顧慮と恐怖を要さないのである。

併し富士山の美しさは、その裾野にある、裾野を繞ぐる毎に、いつも憶ひ出すのは、ツルゲーネフの『獵人日記』の自然である。

裾野と『獵人日記』の自然とは、他で一寸比較して言ふつもりであるから今は止めるが、『獵人日記』は中央露西亞の空と、大氣と色彩とを柔和な調子で描いてあるばかりでなく農奴制度に對する痛烈な抗議を提げてゐるのであるから、簡單に富士山や裾野の輪廓や、色彩を摸索したゞけの、私の日記の本文を以て、何か多少の緣故でもあるかのやうに、引き當てやうとするのは、如何に藝術上の才分力量を、初めから比較の問題以外に置いて、かゝつた仕事としても、不倫な次第である。

併し私は、自分の日記を繰り返しながら、例へば自分で放つた鐵砲の音が、反響となつて、隱々と自分の皷膜に顫いて來るのを、俟つやうな氣がしないでもない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com